

詩時評

第27回

染み込み、
組み込まれて詩はある

松本衆司

DX(デジタルトランスフォーメーション)とは、デジタル技術を用いることで生活やビジネスが変容していくことを云うらしい。このように現代人の変容の歩みは加速度的である。今後、人としてどのような営みが望ましいか、今一度、立ち止まって考えたい。

自然と人の間であろうと、人と人の間であろうと、私たちは対象と自己を同一化し、染み込ませ、組み込まれながら、悲喜交々の時を過ごし、個を生かし、生きてきた。その生の狭間に守るべき自由を感じ、いたわりや慈しみの情愛が育つ。詩のことはそこにこそある。我々には守るべきものがある。この尊い営みを失ってはならない。

浅山泰美『ノックタインのかなたに』(コ
ルサック社)を読む。「口笛」を引く。

誕生日は知らない／いくつかの花言葉を知
っているだけ／月は傾きながらどこまでも
／あとをついてくるけれど／今日も ひと
り／帰る家はまだ見つかからない／町はずれ
しかなない遠い町で／夢から夢をさまよう
／長いながい旅だったのに／ほんの束の間
の短い夏を／朝の汀で／きれいな貝殻を拾
い集めていただけ。／けれど／それもすぐ
に砕け散った／手のなかで 細々に／さく
ら貝の思い出もともに／／誰しも／一番欲
しいものは手に入らない／たとえば 誰か
のころなどは。／指を触れたところから
たちまち／黒ずんでゆく桃のような夕べ
の少女の頬も忘れてしまおう／／古い木の
橋の下を流れる川辺で／愛しいものとはぐ
れた／あの夜 ちぎれた影はそのままだに
／今日 並木道で／小鳥たちだけが／愛を
囁いている／木の瞬を追われた鴉たちが
灰色の影とともにさすらう／後ろの／澄み
わたる空に／口笛が流れた／今日からは
／それだけが頼り

詩の魅力はさまざまだが、浅山泰美の感性
によって構築された詩の世界は、人生の哀感
や痛みを受け止めながら、生きることの尊さ

と明日への誘いに満ちている。故に、読む人
と心を共有する。詩の存立する原風景だ。

宮内喜美子著「わたしたちのたいせつな
の島へ——菅原克己からの宿題」(七月堂)
を読む。「青空を見ようじゃないか——真久田
正さんと菅原克己の『マクシム』」の末尾
を引く。

真久田さんも留置場に入れられた。「金網
の前で／いやというほど殴られた」かもし
れない。その過去によって、なかなか仕事
にも恵まれなかっただろう。「ぼくは賊に
なった」かもしれない。女性とも別れた。
きつと「汚れたレインコートでくるんだ
／夢も、未来も」あった。／だからこそ、そ
れほどまでに、「マクシム」を心の支えに
していらしたのだろう。／菅原克己が非合
法活動で逮捕されたとき、取り調べ中に、
当時は鬼のように怖れられていた特高警察
の刑事に「きみは純粋すぎる」と言われた
という逸話もどこか真久田さんに重なって
見えてくる……。 (略)／心のきれいな
ひとだった。「きれい」どころか澄んで、
澄みきった青い海、石垣島の晴れわたった
青空のようなひとだった。／青い海、青空
を見るたびに、あなたを思いだします。／
〈マクシム、どうだ、／青空を見ようじゃ

ないか)の、／青空に、真久田さんはなつてしまった。

筆者にとつての詩との出会い、菅原克己、真久田正との出会い、東日本大震災当時の心の詩が綴られた心温まる一冊だ。

以倉紘平詩集『明日の旅』（編集工房ノア）を読む。「カムバック シェーン」を引く。

優香と手をつないで／ふるさとの野の道を歩いていると／シェーン カムバック／そんな言葉がふいに口からでた／幼い優香はおもしろがって／なんのこと と／聞いてくる／じーじの手をにぎりしめ／おおきく振り上げ／聞いてくる／アラン・ラッド主演の西部劇の名作だと／答えるわけにもいかず／じーじは ただただ／孫の手をタ空高く振り上げて／シェーン カムバックと／くりかえすばかり／優香も面白がって／シェーン カムバック と／うたつてくれる／もどつてこいよ シェーン／帰ってきておくれよ シェーン／私のなつかしい歳月

全篇を読み終えて、ひとつ静かに溜息をつく。確かな人生の詩を読んだ。妙な形容だが、そんな気分になる。そして、せつなさが募る。

以倉紘平の詩はこのような詩である。

石毛拓郎詩集『ガリバーの牛に「屑の叙詩」残響篇』（紫陽社）を読む。「蝉の暮れ方」を引く。

蝉の暮れ方／うたうには この甲冑が邪魔だ／バックリと割れた背殻を脱ぎ捨てて／新参者の蝉は うたっている／風が立ち／初霜が降りて来る というのに／まだ 朝な夕なに うたっている／うしろむきに黙っている奴もいるが——／ああ いつの間／秋が来てしまった／こまった／こまった／蝉は 歯がないことを すっかり忘れていた／樹液は渴き 固まってきたそれでも 餓えたまんま／蝉は うたっている／腹が減っても／蝉は樹の蜜を吸うことができない／樹の皮に 齧りつくこともなく／短命にへばりつき ただ うただけだ／ただただ ひとつの歌を うたうだけだ／もちろん 情けないほど短い地上の生命なのに／歌と 歌の合間をぬつて／チャッカリ 生殖も忘れちゃいないが——／暗黒の夕暮れ 空腹になると／ノルウェイ人は 鮑屑を喰い／ロシア人は煉瓦を喰らう／なんと かれらは便利な胃袋をもっている／／中世戦乱の飢えが 臆臆を引き起こすと／山形窮民は 乞食に化け／

常磐窮民は 門付けに変わる／なつたんとから 叩き込まれていた／／地上の生活も七日もすれば／蝉はカラカラになって／藪椿の花弁のように／首ごと樹から ポトリと 地に墜ちる／それも 腹を 恋しい空にむけて／蝉は 実りの秋というものを／うたわないのだ／不器用に ただ ひとつ 覚えの歌を／うたうだけだ。

最終行の句点が印象深い。この詩を読む誰もがこの見事な「蝉」の描写の向こうに人としての己の生き様を重ね、この句点に生を実感する。第一詩集『植物体』から今日に至る石毛拓郎の詩のありかを、また実感する。

『一九二〇年代モダニズム詩集―稲垣足穂と竹中郁その周辺―』季村敏夫・高木彬編（思潮社）を読む。五十人の詩人の詩と大正期の児童詩が収められている。詩人略歴、初出一覧、解題、いづれも探究の跡が見られる一冊だ。橋本健吉「都会の恋」を引く。

さても怪しき／師走の午後の薄き日ざしに、／もろもろの／言葉を忘れ、／吾が思ひ／遠く君にかかれり。／されど 都の夕まぐれ、／しづかにむせぶ噴水の／さむき心に現はれしは／ありし日／君がうなじを垂れ

／吾が青き掌に握らせし／空色の細きてぶ
くろ。／吾が黒塗の馬車は／白きシルクの
幕をとち／ひそかにきしりそむるより、／
じつに／うれしき心となり、／それを裏かへ
しなば／ありありと／指環の跡のこりたり。
／そが てぶくろは／いつかしら失せてな
けれど、今年も師走と聞く日の／めぐり来
たるより、／まこと／吾が心に現はれしは
／ありし日／君がうなじをたれ／吾が青き
掌に握らせし／空色の細きてぶくろ

五十年近く前、「口語の時代は寒い」と呟
いた詩人がいた。以来、時代は進み、「口語」
はワードとなり、人々は不寛容な冷たさに閉
じ込められている。このアンソロジー詩集は
現実の柵を超え、時代の先端を切り開く先鋭
な若人の熱意のこもるものだが、それにし
ても温かいのだ。人々の労りの、新しさを夢見
ることの、温かさに満ちている。

竹内新詩集「二人の合言葉」（滯標）を読む。
「サル」とシヨウガネエナア」を引く。

男子も厨房に入るが 私の場合／料理の盛
られた食器をテーブルに運ぶためである／
食後は その食器を流しに運ぶためである
／夕食後は 生ごみを前の畑に捨てにゆく
／夕食前 私 はパソコンに向かっていた

りする／そんなときに「サルー」と呼ぶ
声がある／「運んで下さる！」ということ
だ／「瓶詰のふたを取って下さる！」とい
うこともある／時間を気にしながら 心の
準備をしているので／大抵は タイミング
よく椅子から立ち上がれるが／どうしても
すぐには手を離せないこともあり／そんな
ときはもう一度「サルー！」／もたもた
している／「サルー！」に変わり／それ
でももたもたしている／「サルッ！」にな
る／私はあたふたと切を付け 台所へ行っ
て／「シヨウガネエナア！」と言っ て ま
ずヨーグルトを運ぶ／瓶詰のふたのとき
は ヨーグルト用なので／すぐさま 悪戦
苦闘しているところへ行っ て／「シヨウガ
ネエナア！」と言っ て ふたをひねり／何
事もなかったかのように 湯呑を運んだり
する／始まりはきちんと揃える という
のがルール／二人揃って手を合わせて「頂
きます」と言い／私は時々「ます」と言う
／食後はまた食器を運んで次を待つ／「
生ゴミ！ できました！」と催促が来て
も／直ぐには立ち上がれない「ゴミー！」
の圧力がかかり／「シヨウガネエナア！」
を掛け声にして／腰を上げる私

副題は「夫婦新語集」。全篇、このような
細君の「淳子さん」との言葉と心のキャッチ

ボールである。ムツとしたり、ムカッとしたり、
り、微笑んだり、二人の心の風景がユーモラ
スに描かれた愛の詩集である。

阪井達生詩集「家族の居場所」（蒼穹舎）
を読む。「菓籠もり」を引く。

三分の食料をスーパーで買い／妻は二階
／私は一階で暮らすことになった／家の
外は騒がしい／今日からは 留守宅に
なる／急用があるなら電話 スマホだつて
ある／食事は大きなテーブルで 離れて
／風呂は時間をあけて／トイレには消毒液
を置いた／／幸いにも各部屋には／テレビ
ビデオ 本棚 こたつもある／二人は向か
いあわなくても生活ができる／／朝 昼
晩との三回の検温でも／三六度五分を超え
なかった／咳 鼻水 喉の痛みもなかった
／／四日目の朝がきて／この三日間はなん
だったと疑問が／だれかに言われて 始
めたことではなかった／／何かの対策だつ
たはず／ひよっとして／夫婦のこの先の姿
だったかもしれない

一九年末に発生した新型コロナウイルスに
よる世界的感染は二二年六月現在も収まらな
い。三密回避、マスク、消毒、黙食、人流抑
制、家族感染、リモート等の言葉とともに日

常生活を変えた。が、詩人の眼はそこに暮らしそのものの形を変える現実を投影する。

吉井淑詩集「鍋の底の青い空」（滯標）を読む。タイトル詩「鍋の底の青い空」を引く。

台所にいると／ふと／遠い人がすぐそばにいたり／近い人がずつと遠くにいたりする／鍋の底が抜けた／みると／空がひろがっていた／空の底に／揺れる桐の葉影／曲がった腰骨のぐりぐり／うつむいて寂しい笑顔／あんまりのぞき込むと／底の底のまで抜けてしまうと／修繕屋は言う／放っておけ 放っておけ／わたしの骨のぐりぐりも／やがて尖るだろう／老いた母たちがしたように／毎日肉じゃがをつくって／果てのない鍋で／野蒜や虫も煮るだろう／森や雨も混ぜるだろう／風の香りをさくさく振って

生きることは、と問われているかのような詩である。この詩人の詩を評価し続けてきた。それはこの詩にあるように、生きる匂いを感じさせる詩人だからだ。

愛敬浩一著「草森紳一の問い」（洪水企画）を読む。詩集ではないが、その「写真論 草森紳一」「不許可写真」とペンヤミン「写真小

史」という章のなかに見出したフレイズが印象深い。

移動劇団から引退したひとりの無名の役者が、バリを写真に撮りはじめた

「その人の名はウジェーヌ・アジェといふ。」「と、そのアジェや写真の話が続いていくのだが、誰にでもある人生の転機に思い至った。今まで信じていたことが瓦解したり、捨て去ったり……。その思念への導きに著者が言う「意志的な『雑文』」の価値を見出す。

堀内統義著「青い夜道の詩人―田中冬二への旅―」（創風社出版）を読む。「あとがき」にこうある。

私は昭和四十年代半ばころ、「冬至書房」という、当主の中島善彌さんが一人で仕事されている小さな出版社を、いま思えばご迷惑を顧みず、しばしば訪れては、詩や詩人について、いろいろなお話を聞くことを楽しみにしていた。／やや人見知り傾向の私には珍しいことであった。（略）／そんな折り、中島さんが「四季」復刊の動きがあった、そのための会合があるから行ってみれば、と勧めてくださったことが何度かあった。なにしろずいぶん昔のこと

なので、中島さんと同行したのか、一人だったか記憶も曖昧（きつとその両方であった）のだが、そうした会合の席で、遠くから瘦身長軀、毅然とした田中冬二の姿に接したことが幾度かあった。／ただそれだけのことである。／本書の「ふるさとにて」でも触れたが、冬二の作品には当時から魅かれていたが、自分自身の年齢を重ねること、たつぷりと光と霧、空気と潤いをふくんで興行き深い冬二の詩篇は、私にとってますますなんでも訪れたくなる日だまりとなってきた。

「冬二への旅」の書である。著者の豊かな感性と鋭い洞察により、その「旅」の折々の風景は読者を誘う。

田中冬二の「青い夜道」を引く。

青い夜道／／いつばいの星だ／くらい夜みちは／星雲の中へでもはひりさうだ／／とはい村は／青いあられ酒をあびてゐる／／ほむ ほうむ ほうむ／町で修繕した時計を／風呂敷包に背負つた少年がゆく／／ほむ ほうむ ほうむ……／少年は生きものを 背負つてるやうにさびしい／／ほむ ほうむ ほうむ ……／ねむくなつた星が／水気を孕んで下りてくる／あんまり星が たくさんなので／白い穀倉のある村への路を迷ひさうだ